



小樽から



小樽笑店代表 **渡部 竣介**さん(20)

小樽商大の地域活性化サークル「小樽笑店」の9代目代表としてメンバーの学生85人をまとめている。昨年8月に大学の先輩から代表に指名された。

小樽市出身。最初は「ただ地元だ」という理由でサークルに所属していた。しかし、街を活性化しようとする仲間の活動を目の当たりにしたり、同大の科目「商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト(マジプロ)」を履修する

うちに、徐々に地域を盛り上げたいという気持ちが強くなった。

代表として初めて臨んだ、昨年12月に市内で主催した親子向けイベントでは、来場者数が予想より伸びず、大人数のメンバーをまとめて運営する難しさを痛感した。「メンバー同士の情報共有がうまくできなかった。会員制交流サイト(SNS)などを活用してメンバーの意見をしっかりと聞き、イベントの質を高めたい」と試行錯誤を続けている。

一番大事にしているのは「笑店に関わってくれた人たちをみんな笑顔にすること」。任期は1年。代表として集大成となる夏のイベントに向け「先輩から引き継いできた伝統を大切にしつつ、僕たちの代でなければできないことを何か一つやり遂げたい」と意気込む。(三坂郁夫)

学生と社会人が働く目的について語り合う「ハタモク」。東京、宮城、岡山など各地で開かれ、道内ではNPO法人ハタモク北海道(札幌)が4年前から札幌を中心に毎年5回程度、開催している。就職を控えて「何のために働くの?」という学生たちのモヤモヤした気持ちを社会人が受け止め、就職後もいろいろな悩みを抱えながら働き続けている自らの経験を交えて一緒に話し合っている。(編集委員 中村康利)

「ハタモク」道内でも活発

学生と社会人 働く目的語り合う



学生と社会人が一緒になって働く目的を考えるハタモクの会合

昨年12月、札幌市中央区で通算16回目のハタモク北海道が開かれた。集まったのは札幌、小樽、東京などの就職活動や働く意味を話し

合った。

小樽商大4年の菊地方結さん(22)がハタモクに参加したのは3回目。3年生だった昨年8月から今年5月まで、米国の大学に留学した。この決断を後押ししたのが、昨年6月に参加したハタモクだった。

「本当は2年生で留学したかったが日程が合わなかった。3年生で留学すると就職活動に乗り遅れるかもと迷い、ハタモクで話した。

人が仕事の目標や意味に悩みながら働いていることが分かった」と話した。

菊地さんの友人で初参加の北星学園大3年柴田峰佳さん(21)は「身近に社会人があまりおらず、もうすぐ自分が就職活動することや働くことに実感がわかない。働くというと背広を着て休みが取りづらく、疲れたため息をついているイメージだ」と切り出した。

これに対し、社会人の参

の医療機関で就職試験を受けた後、会場に足を運んだ。「北海道のハタモクに参加するのは2回目。札幌で働くことも考えているので、地元の人や大学生から話を聞きたかった」と話した。

ハタモク北海道の中田隆太代表理事(33)は「普通の社会人と学生が互いの意見を尊重し合う中で、働く喜びや目的、悩みを膝を交えて話せるのがハタモクの特

本音聞く機会 互いにプラス

すると、社会人の方から「焦って周りの学生と同じように動くのではなく、自分が一番したいことは何かを考えてみては」「信じれば道は開ける。留学に集中したらよい」とアドバイスされた」と振り返る。

この日、菊地さんは、帰国後に大手電機会社の内定を得たことを報告。働きながら目標が変わって転職したという社会人の話などを聞き、「就職後も、多くの

加者たちが「アルバイトの時と異なり、会社員になって自分で仕事を工夫しようまくいくと、やりがいを感じられる」などと話すのを聞いた。柴田さんは「就活も大事だが、就職後はどう働くかの方がもっと大切だと思った。私もやりがいのある仕事を見つけた」と手がかりを得たようだった。

東京のハタモクに参加したことがある東京大4年の高石宏和さん(22)は、札幌へ。

ハタモク北海道の参加費は学生初回無料(2回目以降100円)、社会人500円。問い合わせはsapo@hataimoku@gmail.comへ。